

# 『南洋日日新聞』（シンガポール，1914-41年）を 読むための覚書

早瀬 晋三<sup>†</sup>

## Memorandum for Reading *Nan'yo Nichinichi Shimbun* (Singapore, 1914-41)

Shinzo Hayase

The *Nan'yo Nichinichi Shimbun* (daily newspaper in Japanese), which was published in Singapore for 28 years from 1914 to 1941, has been used in several academic books and papers, but it was never used after comprehensively understanding it. The purpose of this article is to organize the necessary prior knowledge for comprehensively using the *Nan'yo Nichinichi Shimbun*. I will summarize why the newspaper was able to be published so early in 1914, what the Japanese society in Singapore was like at that time, and what kind of research possibilities there are, including those in the surrounding areas. The aim is to explore the possibilities of research.

### 〈はじめに〉

1914年から41年まで28年間にわたってシンガポールで発行された『南洋日日新聞』は、これまでいくつかの学術書・論文で断片的に利用されてきたが、総合的に把握したうえで利用されることはなかった。その理由のひとつは、おもに利用されてきた早稲田大学所蔵のマイクロフィルムが図書館でしか読むことができず、1914-36年に発行されたものが利用できるが欠号や破損したものがあり、とくに創刊年の14年は欠号が多く創刊当時の状況がよくわからなかったことによる。このたび、オーストラリア国立図書館所蔵のもので14年および37-41年のものを補うことができ、33年7-9月を除きおおむね全体像を把握できるようになった。そのうえ、創刊年の欠号が多いなど問題はあるが、スタンフォード大学付設フーパー研究所の「邦字新聞デジタル・コレクション」をオンライン、フリーアクセスで利用できるようになった。

『南洋日日新聞』の特色は、まず1914-41年と長期間にわたって発行されたことで、つぎにシンガポールなどイギリス領マラヤが中心だが、とくに初期にはシンガポールがヒト、モノ、情報などのハブになっていたことから周辺の東南アジア、インド、オーストラリア、中国などの記事が充実していたことである。換言すれば、当時日本人売春婦「からゆきさん」が分布していたところで、「からゆきさん」だけでなくゴム農園の開発など海外雄飛の日本人が行き交っていたことから、各地の情報を欲していた日本人読者がいた。さらに、シンガポールは東アジアからヨーロッパへの航路、日本の遠洋練習航海船の寄港地で、日本人要人や文化人が訪れたことが報道され記録を残した〔西原，2017〕。日本の「南

---

<sup>†</sup> 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

進」・南方関与，在住日本人社会の研究だけでなく，地域としての東南アジアを理解するためにも重要な史料である。

本稿の目的は，総合的に『南洋日日新聞』を利用するにあつて，必要な予備知識を整理することである。なぜ，かくも早く1914年に創刊できたのか，当時のシンガポール日本人社会はどのようなものであったのか，さらに周辺地域を含めどのような研究の可能性があるのか，などをまとめ，今後の研究の可能性を探ることである。

まず，「在留本邦人職業別人口表」および「海外日本実業者の調査」から，『南洋日日新聞』が創刊された1914年4月までのシンガポールの日本人社会を概観するが，その後などは拙著『戦前期フィリピン在住日本人職業別人口の総合的研究』（早稲田大学アジア太平洋研究センター，2024年）が参考になる。

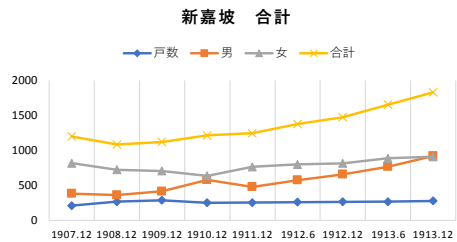
## 1. 1914年4月までのシンガポールの日本人社会 1—在留本邦人職業別人口表から

巻末表1(1)「シンガポール在留本邦人職業別人口表」をもとに作成した表1(1)「新嘉坡 合計」によると，シンガポールの在留本邦人人口は1908年に07年の1,200人から1,085人に減少したが，その後順調に増加し，13年に1,830人になった。男は07年の383人から08年に362人に減少し，09年に急増して579人になった後，11年に479人に減少した。その後順調に増加し，13年に920人になった。女は07年の817人から08年は723人，09年は707人，10年は636人に減少し，その後順調に増加し13年に910人になり，男女ほぼ同数になった。07年の男女比は男が31.9%であったが，10年に47.7%に急増した翌年に38.5%に減少した後，順調に増加し，13年に50.3%で半数を超えた。

巻末表1(1)：シンガポール在留本邦人職業別人口表 1907-13年

表1(1)：新嘉坡 合計

	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12	211	383	817	1200	31.9
1908.12	268	362	723	1085	33.4
1909.12	287	415	707	1122	37.0
1910.12	253	579	636	1215	47.7
1911.12	255	479	766	1245	38.5
1912.6	261	576	800	1376	41.9
1912.12	265	659	816	1475	44.7
1913.6	268	768	887	1655	46.4
1913.12	279	920	910	1830	50.3



グラフ1(1)：新嘉坡 合計

シンガポールは，ペナン，マラッカとともに1826年から海峡植民地を形成し，はじめペナンに行政府がおかれていたが，経済的に著しく発展してきたシンガポールに32年に移った。1913年のシンガポールの在留邦人人口1,830人にたいして，ペナンは346人，マラッカは109人で少数である。それにたいして，その他のマレー半島の諸州の合計は，男1,182人，女1,536人，合計2,718人でシンガポールの1.5倍近く，男の比率は43.5%で10年の23.2%から倍近くになったとはいえ，まだ女の数を上まわっていない。

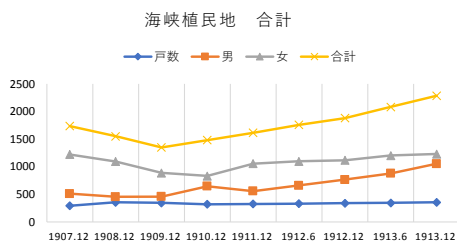
巻末表1(2)：ペナン在留本邦人職業別人口表 1907-13年

巻末表1(3)：マラッカ在留本邦人職業別人口表 1907-13年

巻末表1-1：海峡植民地在留本邦人職業別人口表（合計） 1907-13年

表1-1：海峡植民地 合計

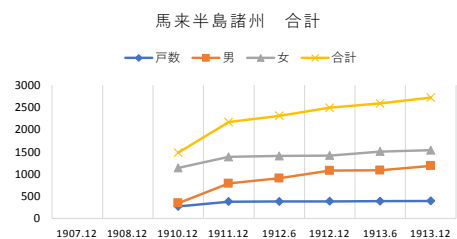
	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12	293	513	1223	1736	29.6
1908.12	357	456	1096	1552	29.4
1909.12	347	460	889	1349	34.1
1910.12	320	648	834	1482	43.7
1911.12	326	559	1056	1615	34.6
1912.6	332	662	1097	1759	37.6
1912.12	341	765	1117	1882	40.6
1913.6	345	879	1204	2083	42.2
1913.12	357	1054	1231	2285	46.1



グラフ1-1：海峡植民地 合計

表1-2：馬來半島諸州 合計

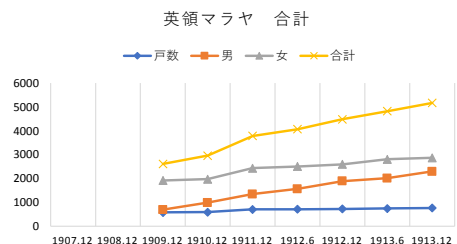
	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12					
1908.12					
1910.12	271	343	1137	1481	23.2
1911.12	379	786	1383	2169	36.2
1912.6	382	902	1407	2309	39.1
1912.12	385	1077	1416	2493	43.2
1913.6	388	1081	1505	2586	41.8
1913.12	393	1182	1536	2718	43.5



グラフ1-2：馬來半島諸州 合計

表1-3：英領マラヤ 合計

	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12					
1908.12					
1909.12	583	695	1916	2611	
1910.12	591	991	1971	2962	33.5
1911.12	705	1345	2439	3784	35.5
1912.6	714	1564	2504	4068	38.4
1912.12	726	1892	2593	4485	42.2
1913.6	743	2012	2804	4821	41.7
1913.12	763	2298	2868	5166	44.5



グラフ1-3：英領マラヤ 合計

シンガポールは、海峡植民地の主都であるだけでなくイギリス領マラヤの中心都市であり、香港と並ぶアジアのハブ港であったため、マレー半島に在留していた日本人にとって特別の意味があった。ハブ港であるという意味では、バンコク、オランダ領東インド、インド、オーストラリアなども結ばれていた。

(1) シンガポール在留本邦人職業別人口表

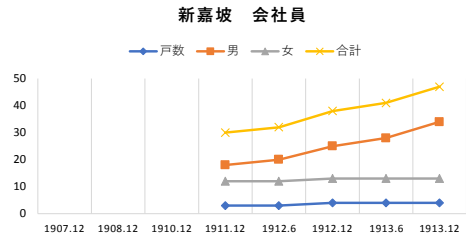
巻末表1(1)「シンガポール在留本邦人職業別人口表 1907-13年」に掲載された順に、おもな職

業をみていく。

表1(1)①「新嘉坡 会社員」によると、1911年にはじめて掲載されてから1度も減ることなく増えている。男は18-34人で徐々に増加しているが、戸数は3-4、女は12-13人であまり変わらない。

表1(1)①：新嘉坡 会社員

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12				
1911.12	3	18	12	30
1912.6	3	20	12	32
1912.12	4	25	13	38
1913.6	4	28	13	41
1913.12	4	34	13	47

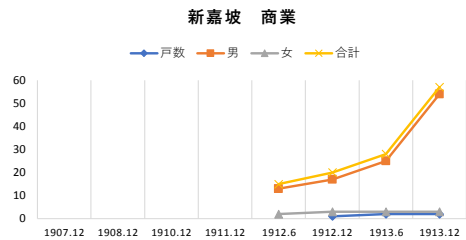


グラフ1(1)①：新嘉坡 会社員

表1(1)②「新嘉坡 商業」によると、男は1912年6月にはじめて掲載された13人から1度も減ることなく増えて、13年6月には25人になり、12月には倍以上の54人に増加した。戸数は1-2、女は2-3人であまり変わらない。

表1(1)②：新嘉坡 商業

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12				
1911.12				
1912.6		13	2	15
1912.12	1	17	3	20
1913.6	2	25	3	28
1913.12	2	54	3	57

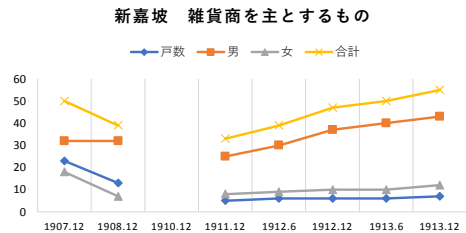


グラフ1(1)②：新嘉坡 商業

表1(1)③「新嘉坡 雑貨商を主とするもの」によると、1907年は戸数23、男32人、女18人で、11-13年の戸数5-7、女8-12人と比べると基準が違うのではないかと思える。11年以降は、男が25人から43人に順調に増加している。なお、兼業のものは最初にかかれた職業に加えたため「主とするもの」とした。

表1(1)③：新嘉坡 雑貨商を主とするもの

	戸数	男	女	合計
1907.12	23	32	18	50
1908.12	13	32	7	39
1910.12				
1911.12	5	25	8	33
1912.6	6	30	9	39
1912.12	6	37	10	47
1913.6	6	40	10	50
1913.12	7	43	12	55



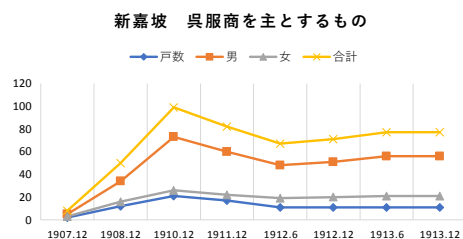
グラフ1(1)③：新嘉坡 雑貨商を主とするもの

表1(1)④「新嘉坡 呉服商を主とするもの」によると、1907年の2戸、男5人、女3人から08年に12戸、男34人、女16人、10年に21戸、男73人、女26人に大幅に増加した後、12年には

11戸，男48人，女19人まで減少し，その後減少することなく安定した。10年はシンガポール全体で男が08年の362人から579人に増加し，女が723人から636人に減少した年で，呉服商の増加はおもな客が女ではなく男であったことになるが，よくわからない。

表1(1)④：新嘉坡 呉服商を主とするもの

	戸数	男	女	合計
1907.12	2	5	3	8
1908.12	12	34	16	50
1910.12	21	73	26	99
1911.12	17	60	22	82
1912.6	11	48	19	67
1912.12	11	51	20	71
1913.6	11	56	21	77
1913.12	11	56	21	77

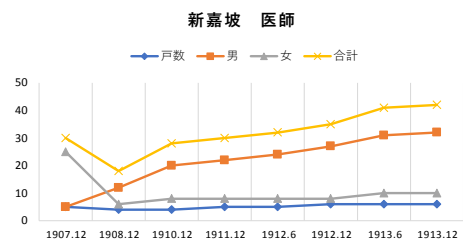


グラフ1(1)④：新嘉坡 呉服商を主とするもの

表1(1)⑤「新嘉坡 医師」によると，1907年の女25人から08年に6人に急減しているが，男は07年の5人から13年の32人へ1度も減ることなく増加している。07年の女25人の多さの意味はわからない。戸数が4-6で少ないのに，男女合計が11-13年に30-42人と多い意味もわからない。日本人相手ではなかったのだろう。熱帯の港町で，伝染病の危険につねにさらされていたことから医師の需要があった。

表1(1)⑤：新嘉坡 医師

	戸数	男	女	合計
1907.12	5	5	25	30
1908.12	4	12	6	18
1910.12	4	20	8	28
1911.12	5	22	8	30
1912.6	5	24	8	32
1912.12	6	27	8	35
1913.6	6	31	10	41
1913.12	6	32	10	42

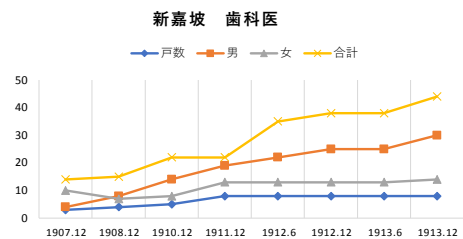


グラフ1(1)⑤：新嘉坡 医師

表1(1)⑥「新嘉坡 歯科医」によると，1907年の女10人が少し多く感じられるほかは「医師」と同じ傾向で，男は07年の4人から13年に30人に増加している。「医師」と同じく，日本人相手だけではなかっただろう。

表1(1)⑥：新嘉坡 歯科医

	戸数	男	女	合計
1907.12	3	4	10	14
1908.12	4	8	7	15
1910.12	5	14	8	22
1911.12	8	19	13	22
1912.6	8	22	13	35
1912.12	8	25	13	38
1913.6	8	25	13	38
1913.12	8	30	14	44



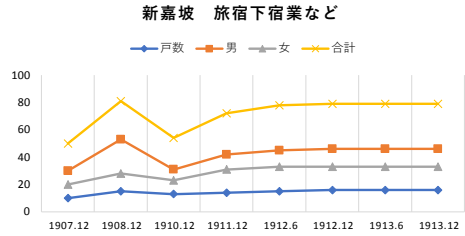
グラフ1(1)⑥：新嘉坡 歯科医

表1(1)⑦「新嘉坡 旅宿下宿業など」によると，1907年の男30人，女20人から，08年に男53人，

女 28 人に増加しているが、10 年に 07 年にほぼ戻っている。11 年以降、戸数 14-16、男 42-46 人、女 31-33 人で安定している。

表 1(1)⑦：新嘉坡 旅宿下宿業など

	戸数	男	女	合計
1907.12	10	30	20	50
1908.12	15	53	28	81
1910.12	13	31	23	54
1911.12	14	42	31	72
1912.6	15	45	33	78
1912.12	16	46	33	79
1913.6	16	46	33	79
1913.12	16	46	33	79

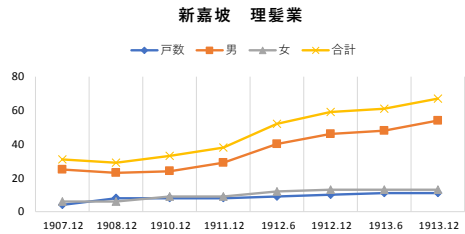


グラフ 1(1)⑦：新嘉坡 旅宿下宿業など

表 1(1)⑧「新嘉坡 理髪業」によると、男は 1910 年の 24 人から 13 年の 54 人に増加し、在留邦人数と同じ傾向にあった。戸数は 08-13 年に 8-11 人、女は 10-13 年に 9-13 人で減りはしないが増加もあまり大きくない。

表 1(1)⑧：新嘉坡 理髪業

	戸数	男	女	合計
1907.12	4	25	6	31
1908.12	8	23	6	29
1910.12	8	24	9	33
1911.12	8	29	9	38
1912.6	9	40	12	52
1912.12	10	46	13	59
1913.6	11	48	13	61
1913.12	11	54	13	67

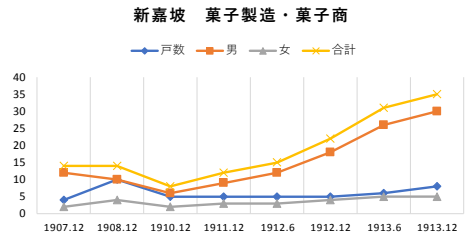


グラフ 1(1)⑧：新嘉坡 理髪業

表 1(1)⑨「新嘉坡 菓子製造・菓子商」によると、1907-10 年に増減があるが、男は 10 年の 6 人から 13 年の 30 人に増加している。戸数は 10-13 年に 5-8 で安定している。

表 1(1)⑨：新嘉坡 菓子製造・菓子商

	戸数	男	女	合計
1907.12	4	12	2	14
1908.12	10	10	4	14
1910.12	5	6	2	8
1911.12	5	9	3	12
1912.6	5	12	3	15
1912.12	5	18	4	22
1913.6	6	26	5	31
1913.12	8	30	5	35

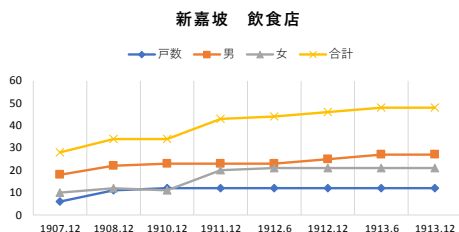


グラフ 1(1)⑨：新嘉坡 菓子製造・菓子商

表 1(1)⑩「新嘉坡 飲食店」によると、戸数は 1907 年の 6 から 08 年に 11 に倍近くに増加した後、10 年から 12 で安定した。男は 07 年の 18 人から 13 年の 27 人まで増加傾向になり、女は 07-10 年の 10-12 人から 11 年に 20 人に急増した後、21 人で安定した。

表 1(1)⑩：新嘉坡 飲食店

	戸数	男	女	合計
1907.12	6	18	10	28
1908.12	11	22	12	34
1910.12	12	23	11	34
1911.12	12	23	20	43
1912.6	12	23	21	44
1912.12	12	25	21	46
1913.6	12	27	21	48
1913.12	12	27	21	48

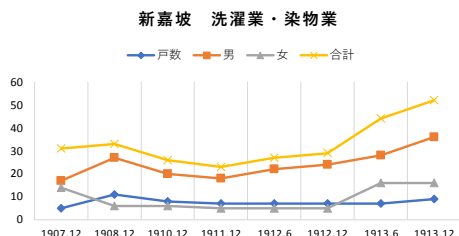


グラフ 1(1)⑩：新嘉坡 飲食店

表 1(1)⑩「新嘉坡 洗濯業・染物業」によると、1907年に戸数は5から11に急増し、男も17人から27人に増加したという、女は14人から6人に急減している。10-12年は戸数7-8、男18-24人、女5-6人で安定していたが、13年6月に女が16人に急増、男は13年12月に36人に増加している。

表 1(1)⑪：新嘉坡 洗濯業・染物業

	戸数	男	女	合計
1907.12	5	17	14	31
1908.12	11	27	6	33
1910.12	8	20	6	26
1911.12	7	18	5	23
1912.6	7	22	5	27
1912.12	7	24	5	29
1913.6	7	28	16	44
1913.12	9	36	16	52

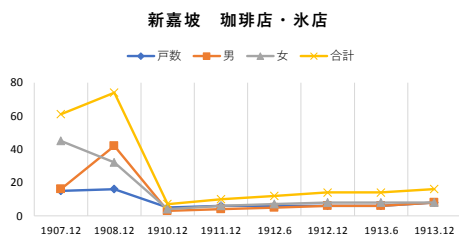


グラフ 1(1)⑪：新嘉坡 洗濯業・染物業

表 1(1)⑫「新嘉坡 珈琲店・氷店」によると、1907-08年に戸数は15-16で安定しているが、男は16人から42人に急増、女は45人から32人に減少、10年には戸数5、男3人、女4人に激減して、それ以降、戸数6-8、男4-8人、女6-8人で小規模で安定している。07-08年は珈琲店だけで、10年以降の多くは氷店であった。

表 1(1)⑫：新嘉坡 珈琲店・氷店

	戸数	男	女	合計
1907.12	15	16	45	61
1908.12	16	42	32	74
1910.12	5	3	4	7
1911.12	6	4	6	10
1912.6	6	5	7	12
1912.12	6	6	8	14
1913.6	6	6	8	14
1913.12	8	8	8	16



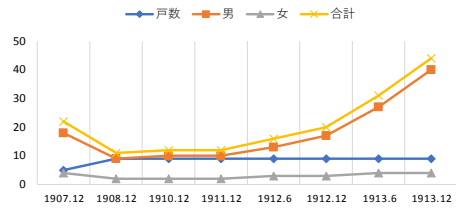
グラフ 1(1)⑫：新嘉坡 珈琲店・氷店

表 1(1)⑬「新嘉坡 大工職」によると、1907年の戸数5、男18人が08年に戸数は9に増加、男は9人に減少した後、戸数は9で増減がなく、男は10-11年の10人から13年に40人に増加した。

表 1(1)⑬：新嘉坡 大工職

	戸数	男	女	合計
1907.12	5	18	4	22
1908.12	9	9	2	11
1910.12	9	10	2	12
1911.12	9	10	2	12
1912.6	9	13	3	16
1912.12	9	17	3	20
1913.6	9	27	4	31
1913.12	9	40	4	44

新嘉坡 大工職



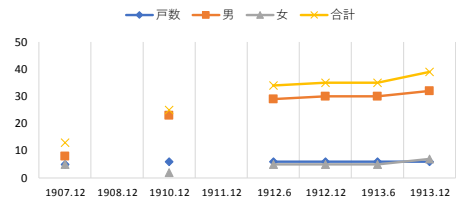
グラフ 1(1)⑬：新嘉坡 大工職

表 1(1)⑭「新嘉坡 売薬業」によると、戸数は 1907 年の 5 から 10 年以降 6 であまりかわりないが、男は 07 年の 8 人から 10 年に 23 人に増加し、12-13 年に 29-32 人で安定した。

表 1(1) ⑭：新嘉坡 売薬業

	戸数	男	女	合計
1907.12	5	8	5	13
1908.12				
1910.12	6	23	2	25
1911.12				
1912.6	6	29	5	34
1912.12	6	30	5	35
1913.6	6	30	5	35
1913.12	6	32	7	39

新嘉坡 売薬業



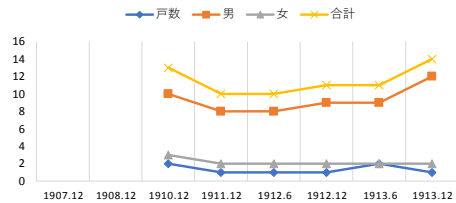
グラフ 1(1)⑭：新嘉坡 売薬業

表 1(1)⑮「新嘉坡 新聞業」によると、1910 年に戸数 2 で新聞社が 2 つあったことが想像されるが、11-13 年には 1-2 戸であった。男は 8-12 人、女は 2-3 人で安定していた。新聞業が継続的に成りたっていたことがわかる。

表 1(1)⑮：新嘉坡 新聞業

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12	2	10	3	13
1911.12	1	8	2	10
1912.6	1	8	2	10
1912.12	1	9	2	11
1913.6	2	9	2	11
1913.12	1	12	2	14

新嘉坡 新聞業



グラフ 1(1)⑮：新嘉坡 新聞業

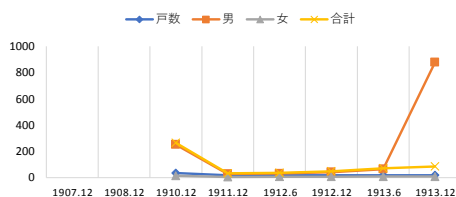
表 1(1)⑯「新嘉坡 護謨栽培業」によると、1910 年に戸数 35、男 250 人、女は 15 人ではじめたが、翌 11 年には戸数 18、男 28 人に急減し、戸数は 13 年まで 18 で固定し、男は増加して 13 年 12 月に 877 人になった。女は 11-13 年に 5-8 人で安定した。シンガポールにあったのは護謨栽培業の事務所で、農園はわずかであった。男の数が一時的に多い意味はわからない。



表 1(1)⑩：新嘉坡 護謨栽培業

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12	35	250	15	265
1911.12	18	28	5	33
1912.6	18	31	6	37
1912.12	18	41	7	48
1913.6	18	64	8	72
1913.12	18	877	8	85

新嘉坡 護謨栽培業



グラフ 1(1)⑩：新嘉坡 護謨栽培業

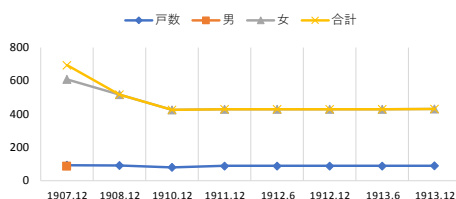
表 1(1)⑩「新嘉坡 娼家・娼妓」によると，1907年は戸数 93，男 86 人，女 609 人で，戸数は 10 年に 80 に減少した後，11-13 年に 89-90 で安定した。男が 08 年以降記載されていないのは，男が楼主になることができなくなったためかもしれない。女は，08 年に 518 人，10 年に 426 人に減少した後，11-13 年に 429-31 人で安定した。統計上，07 年と 10 年は「娼家」「娼妓」，08 年は「妓楼」「雑業」，11-13 年 6 月は「醜業者」，13 年 12 月は「賤業者」で集計されている。このほか，11-13 年に「其他」「雑」で男 45-103 人，女 100-229 人がおり，このうち何人かは娼館関係者だと思われる。

このほか，「外国人被雇人」が 1908 年に女 35 人，10-11 年に 52 人，12 年に 58 人いるが，外国人「現地妻」のこともかもしれない。フィリピンでは，「外人下婢（アマ）」や「保姆」として分類された。12 年には 1 人もいなくなるが，「其他」「雑」女が増加しているのでここに分類されたようだ。

表 1(1)⑪：新嘉坡 娼家・娼妓

	戸数	男	女	合計
1907.12	93	86	609	695
1908.12	92		518	518
1910.12	80		426	426
1911.12	89		429	429
1912.6	89		429	429
1912.12	89		429	429
1913.6	89		430	430
1913.12	90		431	431

新嘉坡 娼家・娼妓



グラフ 1(1)⑪：新嘉坡 娼家・娼妓

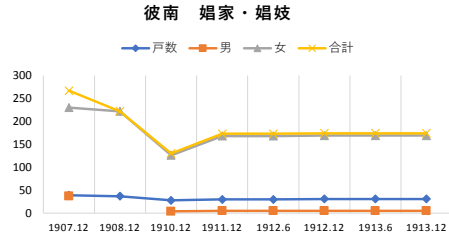
1907-08 年の統計は，増減の激しさや記載がないものがあることから，疑問が残るものがある。後半の安定は，後で述べるように在留日本人間に争いがあり，集計に協力が得られなかったためかもしれない。とくに娼館関係ではまったく協力が得られず，前回のものをそのままに報告した可能性がある。

## (2) ペナン在留本邦人職業別人口表

表 1(2)①「彼南 娼家・娼妓」によると，1907-08 年の戸数 37-39，女 222-230 人から，10 年に戸数 28，女 126 人に減少し，11 年から戸数 30-31，女 168-169 人で安定した。其他雑に 11-13 年に女 16-29 人がおり，娼館関係者の可能性がある。

表 1(2)①：彼南 娼家・娼妓

	戸数	男	女	合計
1907.12	39	37	230	267
1908.12	37		222	222
1910.12	28	4	126	130
1911.12	30	5	168	173
1912.6	30	5	168	173
1912.12	31	5	169	174
1913.6	31	5	169	174
1913.12	31	5	169	174

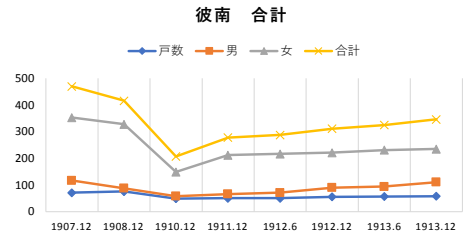


グラフ 1(2)①：彼南 娼家・娼妓

表 1(2)②「彼南 合計」は、娼妓の数と比例している。戸数は 1907-08 年の 71-76 から 10 年に 49 に減少した後、13 年の 58 に増加した。男は 07 年の 117 人から 08 年に 88 人、09 年に 58 人に減少した後、増加し、13 年に 111 人になった。男の比率は、07-13 年 6 月に 21.2-28.9% で多少の増減があったが、13 年 12 月に 32.0% に増加した。娼館に依存した日本人社会であったことがうかがわれる。

表 1(2)②：彼南 合計

	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12	71	117	353	470	24.9
1908.12	76	88	328	416	21.2
1910.12	49	58	149	207	28.0
1911.12	51	66	212	278	23.7
1912.6	51	71	217	288	24.7
1912.12	56	90	221	311	28.9
1913.6	57	94	231	325	28.9
1913.12	58	111	235	346	32.0



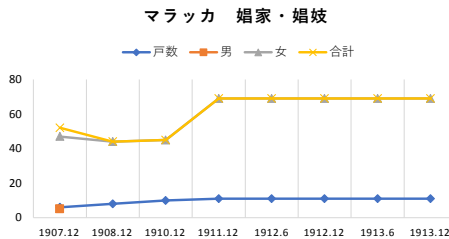
グラフ 1(2)②：彼南 合計

### (3) マラッカ在留本邦人職業別人口表

表 1(3)①「マラッカ 娼家・娼妓」によると、1907-10 年に戸数は 6 から 10 に増加したが、女は 44-47 人で安定していた。11 年に 11 戸、69 人に増加し、その後固定した。新たに調査をしていないか、調査に協力しなかった可能性がある。

表 1(3)①：マラッカ 娼家・娼妓

	戸数	男	女	合計
1907.12	6	5	47	52
1908.12	8		44	44
1910.12	10		45	45
1911.12	11		69	69
1912.6	11		69	69
1912.12	11		69	69
1913.6	11		69	69
1913.12	11		69	69

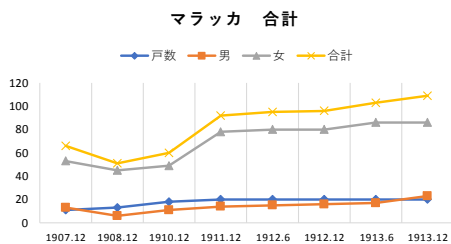


グラフ 1(3)①：マラッカ 娼家・娼妓

表 1(3)②「マラッカ 合計」は、娼妓の数に比例している。1907-10 年に戸数は 11 から 18 に増加したが、女は 53 人から 45-49 人に減少した。11 年から戸数は 20 で固定し、女は 78 人から 80 人、さらに 13 年には 86 人に増加した。男の比率は 10% 台で増減し、13 年に 21.1% になった。かなり娼館に依存した日本人社会であったことがうかがわれる。

表1(3)②：マラッカ 合計

	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12	11	13	53	66	19.7
1908.12	13	6	45	51	11.8
1910.12	18	11	49	60	18.3
1911.12	20	14	78	92	15.2
1912.6	20	15	80	95	15.8
1912.12	20	16	80	96	16.7
1913.6	20	17	86	103	16.5
1913.12	20	23	86	109	21.1



グラフ1(3)②：マラッカ 合計

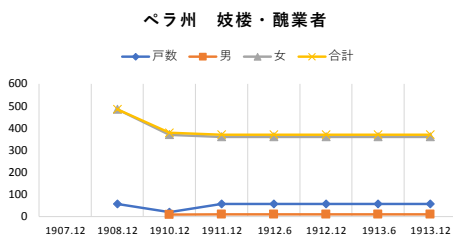
## (4) ペラ州（イポなど）在留本邦人職業別人口表

卷末表1(4)：ペラ州在留本邦人職業別人口表 1908-13年

表1(4)①「ペラ州 妓楼・醜業者」によると、1908年に戸数57、女485人から10年に20戸、370人に急減し、11年に57戸に戻ったが、女はさらに360人に減少した。以後、固定したことから、新たに調査がおこなわれなかったことが想像される。11-13年に其他雑に分類された女76-90人のなかに娼館関係者がいる可能性がある。

表1(4)①：ペラ州 妓楼・醜業者

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12	57		485	485
1910.12	20	9	370	379
1911.12	57	10	360	370
1912.6	57	10	360	370
1912.12	57	10	360	370
1913.6	57	10	360	370
1913.12	57	10	360	370

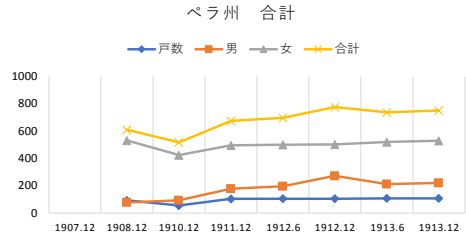


グラフ1(4)①：ペラ州 妓楼・醜業者

表1(4)②「ペラ州 合計」によると、1908年に男78人から10年に93人、11年に178人、さらに12年に273人に増加した。12年に増加したのは、労働者77人がこの年だけ計上されたことによる。13年には212-221人に減少した。11-13年に其他雑に、男40-42人が計上されている。男の比率は08年の12.8%から10年に18.0%、11年に26.4%、その後28.1-35.2%に増加し、娼館依存の日本人社会から若干脱しつつあったことがうかがえる。

表 1(4)②：ペラ州 合計

	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12					
1908.12	93	78	532	610	12.8
1910.12	56	93	425	518	18.0
1911.12	104	178	496	674	26.4
1912.6	106	196	501	697	28.1
1912.12	106	273	503	776	35.2
1913.6	108	212	521	738	28.7
1913.12	108	221	529	750	29.5



グラフ 1(4)②：ペラ州 合計

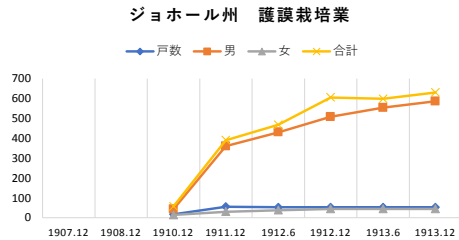
(5) ジョホール州在留本邦人職業別人口表

巻末表 1(5)：ジョホール州在留本邦人職業別人口表 1910-13年

表 1(5)①「ジョホール州 護謨栽培業」によると、1910年に戸数17、男43人、女14人だったのが、11年に55戸、男360人、女30人に増加し、その後53戸で固定し、男は430人から586人、女は38人から44人に増加した。

表 1(5)①：ジョホール州 護謨栽培業

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12	17	43	14	57
1911.12	55	360	30	390
1912.6	53	430	38	468
1912.12	53	508	44	605
1913.6	53	554	44	598
1913.12	53	586	44	630

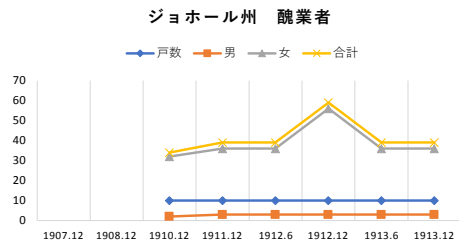


グラフ 1(5)①：ジョホール州 護謨栽培業

表 1(5)②「ジョホール州 醜業者」によると、1910-13年に戸数は10で固定し、女は10年の32人から11年に36人に増加し、12年12月の56人を除いて36人で固定した。この56人は36人の間違いかもしれず、新たに調査していない可能性がある。

表 1(5)②：ジョホール州 醜業者

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12	10	2	32	34
1911.12	10	3	36	39
1912.6	10	3	36	39
1912.12	10	3	56	59
1913.6	10	3	36	39
1913.12	10	3	36	39

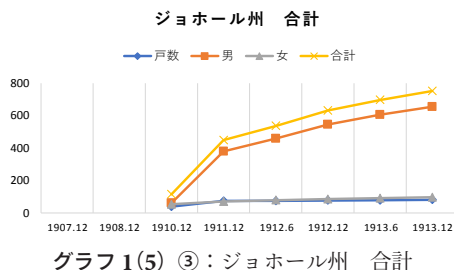


グラフ 1(5)②：ジョホール州 醜業者

表1(5)③「ジョホール州 合計」によると、護謨栽培業の数に並行している。男の比率は10年の53.0%から11年に84.4%に増加し、その後13年まで徐々に増加した。護謨栽培業に依存した日本人社会になったことがうかがえる。

表1(5)③：ジョホール州 合計

	戸数	男	女	合計	
1907.12					
1908.12					
1910.12	39	61	54	115	53.0
1911.12	74	379	70	449	84.4
1912.6	74	458	79	537	85.3
1912.12	77	546	86	632	86.4
1913.6	78	605	92	697	86.8
1913.12	81	655	97	752	87.1



## (6) ネグリスンピラン州（スレンバンなど）在留本邦人職業別人口表

巻末表1(6)：ネグリスンピラン州在留本邦人職業別人口表 1910-13年

表1(6)①「ネグリスンピラン州 護謨栽培業」によると、1910年の戸数12、男35人、女4人から、13年に15戸、49人、13人に順調に増加しているが、大きな伸びではない。

表1(6)①：ネグリスンピラン州 護謨栽培業

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12	12	35	4	39
1911.12	14	39	8	47
1912.6	14	40	9	49
1912.12	15	44	13	57
1913.6	15	44	13	57
1913.12	15	49	13	62

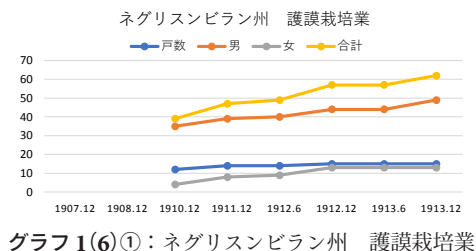


表1(6)②「ネグリスンピラン州 醜業者」によると、1910年の戸数29、女162人から11年に27戸、154人に若干減少し、その後固定した。11-13年に其他雑に女29-42人が計上されており、娼館関係者の可能性がある。11年以降、新たに調査されていない可能性がある。

表1(6)②：ネグリスンピラン州 醜業者

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12	29		162	162
1911.12	27		154	154
1912.6	27		154	154
1912.12	27		154	154
1913.6	27		154	154
1913.12	27		154	154

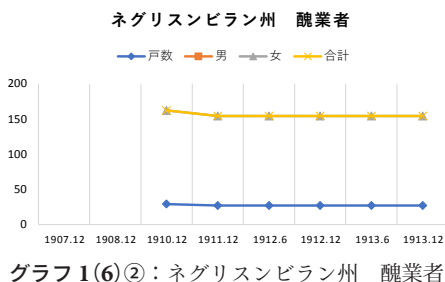
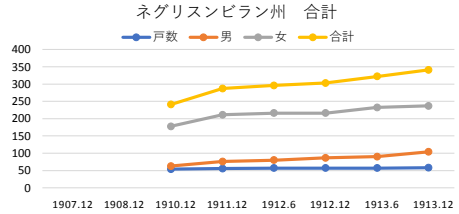


表1(6)③「ネグリスンピラン州 合計」によると、護謨栽培業などの増加傾向が反映されているが、護謨栽培業以外の伸びのほうが大きい。男の比率は、26.1%から30.5%に増加傾向にあるが、娼館関係者が支配的な日本人社会に変わりはない。

表1(6)③：ネグリスンピラン州 合計

	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12					
1908.12					
1910.12	54	63	178	241	26.1
1911.12	56	76	211	287	26.5
1912.6	57	80	216	296	27.0
1912.12	57	87	216	303	28.7
1913.6	57	90	232	322	28.0
1913.12	58	104	237	341	30.5



グラフ1(6)③：ネグリスンピラン州 合計

(7) セランゴール州（クアラルンプールなど）在留本邦人職業別人口表

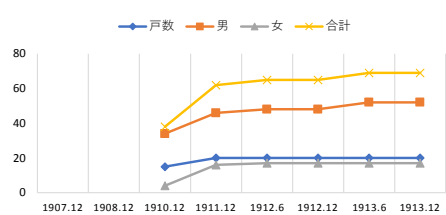
巻末表1(7)：セランゴール州在留本邦人職業別人口表 1910-13年

表1(7)①「セランゴール州 護謨栽培業」によると、1910年の戸数15、男34人、女4人から増加して、11-13年に戸数20、男46-52人、女16-17人で安定している。

表1(7)①：セランゴール州 護謨栽培業

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12	15	34	4	38
1911.12	20	46	16	62
1912.6	20	48	17	65
1912.12	20	48	17	65
1913.6	20	52	17	69
1913.12	20	52	17	69

セランゴール州 護謨栽培業



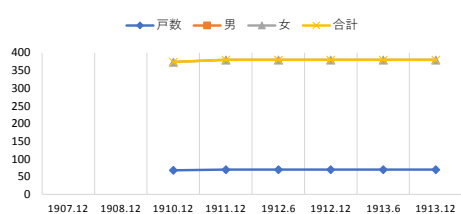
グラフ1(7)①：セランゴール州 護謨栽培業

表1(7)②「セランゴール州 醜業者」によると、1910年の戸数68、女374人から若干増加した後、11-13年に戸数70、女380人で固定している。新たに調査されなかった可能性がある。其他雑の女70-93人が娼館関係者であった可能性があり、12-13年には男が6-7人いた。10年に旦那持、女62人がいた。

表1(7)②：セランゴール州 醜業者

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12	68		374	374
1911.12	70		380	380
1912.6	70		380	380
1912.12	70		380	380
1913.6	70		380	380
1913.12	70		380	380

セランゴール州 醜業者

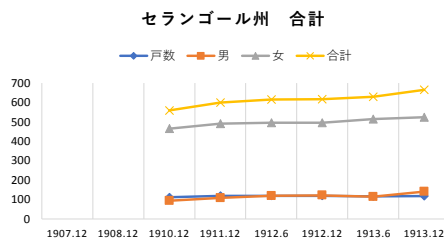


グラフ1(7)②：セランゴール州 醜業者

表1(7)③「セランゴール州 合計」によると、戸数112、男94人、女465人から増加した後、戸数117-119、男109-141人、女491-524人で安定している。男の比率は16.8-21.2%で、娼館に依存した日本人社会であったことがわかる。

表1(7)③：セランゴール州 合計

	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12					
1908.12					
1910.12	112	94	465	559	16.8
1911.12	119	109	491	600	18.2
1912.6	119	120	495	615	19.5
1912.12	119	122	495	617	19.8
1913.6	117	115	514	629	18.3
1913.12	118	141	524	665	21.2



グラフ1(7)③：セランゴール州 合計

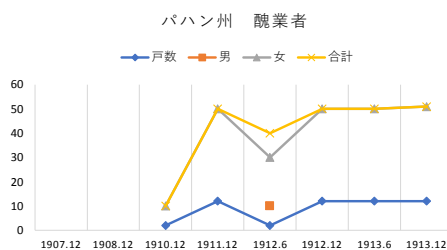
### (8) パハン州在留本邦人職業別人口表

巻末表1(8)：パハン州在留本邦人職業別人口表 1910-13年

表1(8)①「パハン州 醜業者」によると、1910年に戸数2、女10人であったのが、11年に12戸、50人に増加している。その後、其他雑を加えると、戸数12、男10人、女80-91人になり、安定していたことがわかる。

表1(8)①：パハン州 醜業者

	戸数	男	女	合計
1907.12				
1908.12				
1910.12	2		10	10
1911.12	12		50	50
1912.6	2	10	30	40
1912.12	12		50	50
1913.6	12		50	50
1913.12	12		51	51

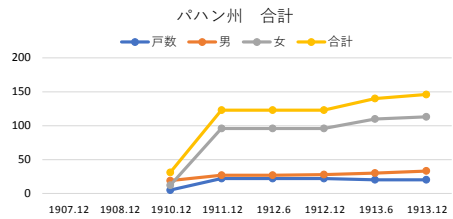


グラフ1(8)①：パハン州 醜業者

グラフ1(8)②「パハン州 合計」から、醜業者の数と合計とが並行していることがわかる。男の比率は、11-13年に21.4-22.6%でひじょうに安定している。これに其他雑の男10人を加えると、ほぼ娼館関係に依存した日本人社会であったことがわかる。

表 1(8) ②：パハン州 合計

	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12					
1908.12					
1910.12	5	19	12	31	61.2
1911.12	22	27	96	123	22.0
1912.6	22	27	96	123	22.0
1912.12	22	28	96	123	22.8
1913.6	20	30	110	140	21.4
1913.12	20	33	113	146	22.6



グラフ 1(8) ②：パハン州 合計

(9) トレンガヌ州

1910年のみ集計されており、5つの職種(売薬業、椰子栽培業、雑貨商、錫鉱従事者、売薬行商)で、戸数4、男12人、女3人、合計15人が報告されている。

巻末表 1(9)：トレンガヌ州在留本邦人職業別人口表 1910年

(10) ケランタン州

1910年のみ集計されており、売薬商1戸、男1人が報告されている。

巻末表 1(10)：ケランタン州在留本邦人職業別人口表 1910年

(11) トレンガヌ、ケダ、ケランタン州在留本邦人職業別人口表

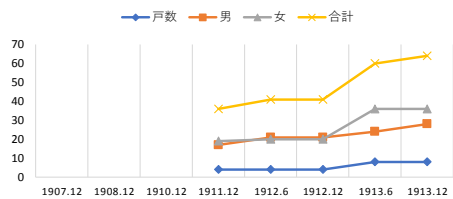
巻末表 1(11)：トレンガヌ、ケダ、ケランタン州在留本邦人職業別人口表 1911-13年

表 1(11)「ツレンガヌ、ケダ、ケランタン州」によると、1911-13年に戸数4-8、男17-28人、女19-36人、合計36-64人であった。13年に賤業者の戸数3、女12人で娼館があったことがわかるが、其他雑に戸数0、男5-8人、女15-20人がおり、娼館を構えない者がいたことを想像させる。そのほか、雑多な職種に男が従事していた。男の比率は40.0-51.2%であった。

表 1(11)：ツレンガヌ、ケダ、ケランタン州

	戸数	男	女	合計	男比率
1907.12					
1908.12					
1910.12					
1911.12	4	17	19	36	47.2
1912.6	4	21	20	41	51.2
1912.12	4	21	20	41	51.2
1913.6	8	24	36	60	40.0
1913.12	8	28	36	64	43.8

ツレンガヌ、ケダ、ケランタン州



グラフ 1(11)：ツレンガヌ、ケダ、ケランタン州

巻末表 1-2：マレー半島諸州(合計) 1910-13年



## (12) サラワク国（クチンなど）

1913年6月と12月に集計されており，戸数10，男25-30人，女28人であった。

巻末表1(12)：サラワク在留本邦人職業別人口表 1913年

## (13) 英領北ボルネオ（サンダカンなど）

1913年6月に，戸数不詳，男20人，女63人と報告された。多くが娼館関係だと思われる。12月にはこのほか，飲食店，菓子業，珈琲店，雇用人で計3戸，全員女6人が報告された。

巻末表1(13)：英領北ボルネオ在留本邦人職業別人口表 1913年

## (14) ブルネイ

1913年6月と12月に，戸数不詳，男12人，女4人が報告された。

巻末表1(14)：ブルネイ在留本邦人職業別人口表 1913年

巻末表1-3：イギリス領マラヤ・ボルネオ在留本邦人職業別人口表（総計） 1910-13年

なお，1909年12月末現在の在留本邦人職業別人口表は得ることができなかったが，つぎのような訂正が報告された〔1910年12月22日，在新嘉坡領事代理副領事近藤愿吉から外務大臣伯爵小村寿太郎宛〕ので，表・グラフに加えた。

職業別	戸数	男	女	計
「新嘉坡」ノ部				
官吏（駐在武官ヲ含ム）	3	4	2	6
雜貨商（仲次業ヲ含ム）	8	42	8	50
合計	287	415	707	1,122
海峡殖民地ノ部 通計	347	460	889	1,349
総計	583	695	1,916	2,611

## 2. 1914年4月までのシンガポールの日本人社会 2—海外日本実業者の調査から

在留本邦人職業別人口表に集計されたシンガポール在住日本人が，いつからどれくらいの規模で，事業をおこなっていたかは，海外日本実業者の調査からその一端がわかる。外務省は，1903年10月から海外各地に在留する日本人実業者の調査を実施し，06年から15年まで毎年調査し，調査結果が刊行された。シンガポールでも実施され，巻末表2「新嘉坡 海外日本実業者の調査 1903-13年」としてまとめた。ただし，シンガポールでは09年は前年の08年，13年は12年のものと同じで新たに調査をしなかったようだ。

巻末表2：新嘉坡 海外日本実業者の調査 1903-13年

最初の1903-04年に調査され、刊行された『海外日本実業者ノ調査』に掲載されたシンガポールの「実業者」は8つであった。「貿易商」の三井物産合名会社新嘉坡支店が売上売買430万弗以上で飛び抜けており、つぎが「売買業」の乙宗商店支店の60万弗、以下、いずれも「売買業」の米谷商店9万3000弗、渋谷商店5万6430弗、大和商会4万7800弗、米井商店3万2000弗、矢ヶ部商店2万2500弗、日新商会1万5000弗であった。1906年に1海峡ドルは2シリング4ペンスで固定された〔西村2005〕。

三井物産は三井財閥の中核企業で、日本初の総合商社で東南アジア各地に早くから支店・出張所を構えていた。13年に「石炭輸入、雑貨輸出入、保険船舶代理業」、売上高718万余弗、日本人使用人14人になった。乙宗商会は、大阪のセルロイドを原料とした櫛卸売業者で、シンガポールに支店を出していた。13年に「輸出入貿易、雑貨小売」で、売上高112万弗、日本人使用人10人になった。この2つのほか、13年に掲載されたのは「日本雑貨」で、売上高15万弗、日本人使用人9人の大和商会だけだった。

1913年に上記3つ以外で掲載されたのは9つで、取引売買の多い順に、以下の通りであった：「活動写真フィルム販売」の播摩ホール、10万弗（シンガポールのみ）、日本人使用人23人；「食料品、日本雑貨卸小売」の日本商行、8万弗、日本人使用人12人；「薬品及美術品販売」の日本売薬株式会社支店、8万弗、日本人使用人15人、馬來人使用人2人；「食料品、日本雑貨卸小売」の小松芳松商店、6万5000弗、使用人8人；「日本雑貨、食料品卸小売」の中川商店、5万弗、使用人8人；「呉服」の越後屋、3万弗、使用人7人；「酒類販売」の田本商店、2万5000弗、使用人4人；「日本雑貨卸小売」の庄司商店、2万5000弗、使用人4人；「日本雑貨陶磁器」の長井禎商店、2万弗、使用人7人だった。これらの商店は、娼館が支配的な日本人社会の消費に頼り、日本の骨董品・美術品的なものを裕福な外国人に売っていた様子がうかがえる。

シンガポール以外では、1906年にペナンで「企業」の松尾兼松が1万3000弗以上、取引売買したというのが詳細はわからない。「コーラ、ランポー」（クアラルンプール）では、10年以降、「呉服、雑貨」「日本雑貨卸小売」の松田商店が2万6000-3万5000弗を売り上げ、5-6人の使用人がいたが、娼館に寄生していたようだ。ジョホール州では、11年から「護謨栽培業」の三五会社が掲載され、13年にゴム生産高7万斤、労働者を除き日本人使用人70人がいた。

以上のことから、日本人社会は娼館が支配的で、日本商品はこの表に現れない小規模商店や行商人によって扱われていたと考えられる。

### 3. 1914年4月までにシンガポールで発行された日本語新聞

1910年12月に編纂されて以来『新聞総覧』（佐藤是康編、日本電報通信社、1910-43年）は、ほぼ毎年出版され、日本各地だけでなく海外で発行された日本語新聞についてもおもなものが掲載された。東南アジア関係では、17年版に『南洋日日新聞』が掲載されたのが最初で、つぎのように「沿革」が紹介された。

大正三年四月一日前日本人栽培業者協会幹事曾木重高とやまと新聞特派員古藤秀之〔三〕の両氏共同して同紙を創刊し曾木重高氏は主として編輯を掌り古藤秀之〔三〕氏代表者として営業の事

を担任せしが大正四年五月曾木重高氏病を得古藤秀之〔三〕氏編輯其他一切の事務を見る事となり曾木重高氏は同年十一月廿四〔五〕日不幸不歸の客となれり

つづけて1914年4月1日創立、個人経営、古藤秀之〔三〕社長、野村貞吉主筆、4頁、毎夕刊、購読料1弗（海峡植民地貨）などが記載された。

1921年版に20年10月31日創立の『爪哇日報』が掲載された後は、34年までこの2紙のみだった。22年版で『爪哇日報』は、つぎのように紹介された。

広汎なる南洋、就中蘭領東印度に散在せる六千の在留邦人の連絡機関とし、且つ対和蘭官民に対する意思疎通の機関として大正九年十月三十一日創刊、蘭領唯一の邦字新聞なり。在留邦人にして本紙を読まざる者なく、又小数なれども蘭人、土人及び支那人の読者を有す。

35年版に31年創立の『新嘉坡日報』と33年創立の『日蘭商業新聞』が新たに掲載され、41年版に40年創立の『ダバオ日日新聞』が加わった。

以上のことから、『南洋日日新聞』のように28年間にわたって、継続的に東南アジアの日本人社会の様子を伝えた新聞はほかになく、20年代からについては『爪哇日報』からもわかるが、シンガポールのように周辺地域から情報を集めることもできなければ、要人が寄港してその様子を伝えることもそれほど多くなかった。

巻末表3：『新聞総覧』掲載の東南アジアで出版された新聞、1917-41年

さらに詳細な東南アジアでの新聞の出版状況については、蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』（学而書院、1936年）からわかる。1910年に半週刊『南洋新報』、日刊『星嘉坡日報』、週刊『星坡サンデー』が創刊され、『南洋新報』は活版印刷で500以上売れていたが、残り2紙は謄写版刷りで100か200以内の発行部数だった。『南洋日日新聞』は、17年の外務省の調査で、「発行部数一千二百枚、記事内容整はず、当地邦人ノ与論ヲ代表スルニ足ラズ」と報告されたという。24年には発行部数1,800枚になったが、実際はその半数くらいだったかもしれないとも書かれている。17年には週刊『星坡タイムス』が創刊され、約200部印刷されたが長続きしなかった〔蛭原1936:244-45, 363〕。

しかし、現在フーバー研究所が「邦字新聞デジタル・コレクション」で公開しているものは、さらに多い。『南洋新報』は、1912年4月から16年2月までのものが公開されており、つぎのような解説がある。

『南洋新報』はシンガポールで福田宇太郎が1909年に発刊した。主に、日本の政治に関する社説、東南アジアのニュース、連載物、広告からなる。1913年6月11日に日刊になった。福田が日本に帰国後、発行人は1915年に藤田天民、北元隆に、更に1916年早々には清水文太郎へと矢継ぎ早に代わった。

『南洋自由評林』は、1912年10-12月のものが公開されており、つぎのような解説がある。

『南洋自由評林』はシンガポールで発行された謄写版の週刊誌だった。現存する発行日付と発行号から推測、発刊は恐らく1911年末或いは1912年初頭で、発行人はシンガポールの古参の齒科医で同地の日本人社会で活躍したと思われる山本作次郎だった。主に論評と広告が主に掲載された。

『南洋週報』は、1912年10月から1913年6月までのものが公開されており、つぎのような解説がある。

『南洋週報』はシンガポールで建部隆喜（碧浪）が1912年10月31日に発刊した謄写版週刊誌である。社説、世界ニュース、連載物、広告を中心とした内容だった。建部は職業幹旋業を営む躬行社を経営し、1913年南京で不慮の死を遂げた。当デジタル・コレクション所蔵の最終号は1913年6月26日である。

『ジャパニース エコー』は、1914年3-4月のものが公開されており、つぎのような解説がある。

『ジャパニーズ・エコー』はシンガポールで児玉茂一が発行人兼編集者として1914年3月3日に謄写版発刊した日本語新聞である。同新聞がどのくらい発行を続けたかは明らかでないが、当デジタル・コレクションの所蔵号は全て1914年である。二面からなる新聞は主に現地の日本人ビジネスの広告と世界中から集められたニュースの社説である。初刊に宣言されている主義は「広く与論ヲ集メ理義ヲ尽シ」、「弱者ノ味方タルベシ」である。この主義に沿って、現地の日本領事に対する手厳しい社説を連載した。

『南洋日日新聞』は、1914年4月から1941年9月までのものが公開されており、つぎのような解説がある。

『南洋日日新聞』は日本人の南洋拡大への主な経済拠点だったシンガポールで1914年に発刊された。当初は謄写版だった。古藤秀三が社長、主幹を務めた。東京に支社があった。同氏が1930年に死去後、内部分裂が明白になり、編集長、長尾正平が別の新聞、『シンガポール日報』を創刊、手塚貞吉が『南洋日日新聞』の発行者になった。当コレクションが所蔵する最後の号は1941年9月30日である。その後、日本軍によるシンガポール占領後、同盟通信社昭南（シンガポール）支局が『昭南新聞』を1942年12月8日に発刊した。

『南洋パック』は、1915年2月から1916年2月までのものが公開されており、つぎのような解説がある。「『南洋パック』はシンガポールで原金一が1915年2月6日に発刊した日本語の挿画入り週刊誌である。謄写版で風刺が中心だった」。

『南洋実業時報』は、1918年2-6月のものが公開されており、つぎのような解説がある。「『南洋実

業時報』は南洋の経済活動を中心として発行された日本語の週刊誌だった。印刷兼発行者、池田範司が1917年に発刊した。1918年9月に『[南洋実業新報]』に改題され、日刊になった。

『南洋実業新報』は、1918年9月から19年2月までのものが公開されており、つぎのような解説がある。

『南洋実業新報』は『南洋実業時報』から改題され、1918年9月にシンガポールで発刊された。この時、週刊から日刊になった。新聞名が示唆するように、南洋の経済活動を中心とし、シンガポールの他の日本語新聞と異なった独自色を出した。池田範司一人の新聞経営に吉田實も参加した。

『新嘉坡日報』は、1931年3月から41年12月までのものが公開されており、つぎのような解説がある。

『新嘉坡日報』はシンガポールで元『南洋日日新聞』の主幹、長尾正平が発行した日本語新聞である。満州事変が勃発した1931年に発刊された。週刊の英語版がシアトルからビル・ホソカワが編集者として参加し、1938年3月23日に発刊、週刊の中国版は1939年2月20日に発刊された。動乱と国際関係が悪化する中、イギリス領であったシンガポールで少なくとも1941年12月まで発行を続けた。その後、日本軍によるシンガポール占領後、同盟通信社昭南（シンガポール）支局が『昭南新聞』を1942年12月8日に発刊した。当デジタル・コレクションには1941年11月および12月発行の中国版が含まれる。

ではなぜ、1910年にシンガポールの日本人人口1,215人（うち女636人）、英領マラヤ全体（英領ボルネオを含む）でも2,962人（うち女1,971人）の日本人社会で新聞が発行できたのだろうか。その事情を知る参考文献として、『シンガポール 日本人社会百年史』（シンガポール日本人会、2016年）の青木澄夫「紛憂〔擾〕の1910年と日本語新聞の発行」「幻の日本人会成立 『南洋新報』、『星嘉坡日報』、『自由評論〔林〕』と日本人社会」「シンガポールの日本語新聞」「原袋江（金一）の『南洋パック』（32-67頁）がある。これによると、09年7月1日に『南洋新報』、同年10月18日に『星嘉坡日報』（1911年12月25日廃刊）、10年5月1日に『南洋自由評林』（1910年11月13日廃刊、13年7月14日復刊）が創刊されており、11年には週刊『星坡サンデー』もあった。

さらに詳しく論じたのがシンガポールで発行された『南洋時代』の第4巻2号（1933年1月15日）から連載された伊藤浪韻（記者）「新聞紙」であるが、話が前後し要領を得なく矛盾する部分があり、第4巻20号（1933年10月15日）に（十九）が掲載され「(続く)」で終わった後、『南洋時代』自体がその後発行されたのかどうかかわからず利用できない。

これらの記述の裏をとるのに重要な文献として、西村竹四郎『在南三十五年』（安久社、1936年）がある。日記をもとにしたため年月日が明記され、『南洋新報』や『星嘉坡日報』の創立年も、この本に基づいて1908年としているものがあるが09年の間違いである。本書は、1941年に『シンガポール三十五年』（東水社）とタイトルをかえて復刊されているが、27年のヨーロッパ旅行が割愛されただけでなく、「戦闘武器は三新聞」など随所に削除された箇所がある。

これらを参考に、シンガポールで早くから日本語新聞が発行された理由を探ると、そのひとつは、すでに英語、中国語などの新聞が発行されており、世界情勢、シンガポールを取り巻く周辺地域の情報を得ることが容易で、日本人社会の動向を加えることで、紙面を埋めることができたことがわかる。日本にかんしては、大阪朝日、大阪毎日、東洋通信、台湾日日、冒険世界、東京日日、東洋経済雑誌など、日本や台湾の新聞・雑誌の通信員や寄港者がいたことで情報を得やすかった。

以下、「新聞紙(二)」(1933年2月1日)によると、つぎのような概略が得られる。1901-03年ころ、確認がとれないが、シンガポールで最初に新聞を発行したのは西村司馬だったといわれている。西村は大阪朝日新聞の社長村上龍平の片腕の西村天囚の甥で、朝日新聞通信員の肩書きで香港からシンガポールにやってきた。西村が新聞に見切りを付けて売薬行商をするといって配下の者30名を連れてオランダ領に行った後、中国から流れてきて西村のところに寄宿していた福田天心(宇太郎)が、後を継いで『南洋新報』を発行した。娼館で寄付金を募り、頼母子無尽を起こして資金を調達して、謄写版から活字印刷に発展した。当時いわゆる「親分」として名を馳せていたのが、二木多賀二郎や小林千代吉であった。

そこに自由党員で社会主義者の古江香夢(伊藤友治郎)が、日本を逃れ朝鮮、中国で新聞を発行していたができなくなり、香港経由でシンガポールにやってきた。娼館をバックにした『南洋新報』にたいして、社会の覚醒を求めて『星嘉坡日報』を創刊した(1910年12月1日付第311号の題字は『夕刊星架坡日報』)。ちょうど、1891年に支店を設けた三井物産や94年にシンガポールに渡航してきた医師の中野光三を中心とした娼館が支配的な日本人社会にかわって、社会主義者の主張に耳を傾ける「正業」の者が増えてきていた。『星嘉坡日報』は伊藤商店からあがる利益で発行されていたが、それを支えたのは広告で、丸十呉服店、矢ヶ部商店、小山商店、都ホテル、松月亭、さらにペナンやクアラルンプールの旅館などのものがあつた。初期の娼婦、嬪夫、坊主、医者、歯医者、床屋、料亭、旅館、洗濯屋、吹矢、玉転がし、マッサージ、靴屋、うどん屋に加えて、一般商店が現れ、ゴム栽培や錫鉱山にかかわる者もでてきていた。日本人経営の最初のゴム会社三五公司護謨園が、1906年に開業した。

伊藤吉彌は、1910年に発行した『南洋之大富源 全』で「馬來聯邦の人口は日に月に増加し従て商工業の発達は著しき進歩をなしつつある」と述べ、「日本労働者出稼地として最好適地」と紹介している。いっぽう、「蘭領殖民地は依然として旧態を存じ人口増加の遅々たると諸事業の発達せざる」と「蘭領殖民地概論」の冒頭で述べている。

「正業」者が多くなると、妻帯者が増えて子どもが生まれ、子どもたちのための教育、具体的には小学校の開設が話題になり、その運営を担う日本人会を組織しようとした。1909年に青年会が設立され、剣道や柔道、英語教育に力を入れ、三井物産支店長の林徳太郎が会長、中野光三が副会長に就いていた。この青年会を改造して10年5月8日に日本人会が成立し、会長に社会主義者の長田秋濤、副会長に中野光三、長野実義(大和商会)などの役員が選ばれた。これを不満とする旧青年会は『南洋新報』に書きたて、たいして『星嘉坡日報』が反駁し、6月に新たに赴任してきた近藤恩吉副領事が旧青年会派に与して、長田秋濤が一時帰国しているあいだに日本人会を解散した。ここに旧派(守旧派、中野派、新報派)と新派(革新派、長田及び長野派、日報派)の泥仕合がはじまった。

このようななか「広く我が平民主義を鼓吹し拡張して共に俱に其慶に頼らんと期する」として『南洋自由評林』を、歯科医の好漢山本作次郎が週刊で1910年5月1日に創刊した。広告には、鈴木栄作



領事、星嘉坡日報社、林徳太郎、中野光三、仁木多賀二郎など両派が祝辞を寄せた。最初は、中江兆民の平民主義を唱え、平和主義、絶対中立を標榜したが、すぐに旧派を攻撃して、ついに領事をも駆逐した。ところが6月に山本は変節して旧派につき、日本人会は解散した。しかし、領事が『南洋新報』のみを優遇したことから何度も号外を出して近藤副領事を攻撃し、不信任案を外務省に送り訴えた。

西村竹四郎は、『在南三十五年』に「戦闘武器は三新聞」の見出しの下、まず「此の紛擾に在留民は新聞を悪用し、新聞は在留民を利用し互にしのぎをけづつた」と述べて、3つの新聞をつぎのように紹介した〔西村 1936: 126-27〕。なお、西村は『シンガポール三十五年』の最後の「奥書」冒頭で、つぎのように紹介されている。「著者西村点南翁は明治四年四月四日福岡県三井郡合川村に生れ、東京帝国大学医科大学に医術を修め、明治三十五年雄志を抱いて单身支那よりシンガポールに渡り、医道に立つて刻苦こゝに三十有五年…」〔西村 1941: 464〕。

南洋新報（明治四十一年〔二〕年七月創刊）は福田天心の経営である。天心といふ男は得体の知れない人物であり、アフリカに行くとして数千金の餞別を貰ひ、ピナン迄行つて女を身請し金も費ひ果たし、再び新嘉坡に舞ひ戻つてケロリとしてゐた。褒めれば豪放、悪く言へば無恥だ。始めの新聞は謄写版であつたが後に活版に改めた。在留民の財布の紐の緩かな時代とは云へ、並大抵でない苦勞であつた。此の新聞は在留民間に波瀾を巻き起させ、紛擾を拡大させた迄の事で、さして社会の利益にはならなかつた。

新嘉坡日報（明治四十一年〔二〕年十月十八日創刊）は伊藤香夢の主幹するところ、香夢は自由党の壮士であつたといふ。精悍な気魄を新嘉坡暗黒面の革正に注ぎ、南洋新報と守旧派を玉石俱に燬くの勢で猛撃した。両新聞の筆戦の跡を見ると醜怪矯激の文字、悪毒辛辣の文章、是れが在留民社会の縮図かと、自ら呆れるばかりであつた。そういふ僕も実は此の濁浪滔天の中に巻き込まれた人間で、済ましこんだ事は言はれない。

自由評林（明治四十三年五月一日創刊週刊）南洋新報と新嘉坡日報との悪戦中名乗りを挙げたもの、山本作次郎氏の主宰するところ、評林は喧嘩本位で、気に食はぬ者は容赦なく檣玉に挙げる。文章に風刺画に独得の攻防戦振りを發揮した。副領事近藤愿吉氏は、最もこつびどくやられた一人で、氏は策の出づる所を知らず、遂に神経衰弱に陥つた。

なお、1911年1,2月ころに「厳正中立を標榜して」『新嘉坡サンデー』が発刊されたが、7,8ヶ月後の秋ごろ廃刊になった。また、日本人小学校が、12年に開設された。

新聞が発行されたもうひとつの理由に、かなり高学歴の者がいたことがある。すでに、医師、歯科医、三井物産の会社員などがいたことは述べたが、これらの高学歴の者が、出身大学で集うようになっていた。まず、1912年10月11日に7月から協議していた第1回学士会が開催された。当地在住大学出身の学士は十数名で、奥田、笠原、関川、安達が發起人となって招待状を發した〔『南洋新報』1912年7月17日、10月8日〕。つづいて、慶応同窓会が、13日に開催された。集ったのは、菅原商店の松田、サラワクの日サ商会の米田、南洋起業の横山、三井の稲葉であった〔同1912年10月16日〕。さらに、早稲田大学校友会が13年1月5日に発会式を催した。發起人は、遠藤、古藤ほかであった〔同1913年1月1日〕。校友がシンガポールを訪ねてくるのを機会に臨時校友会が開催され、

13年7月11日には南亜公司重役の井上雅二が南洋視察を終えてシンガポールに帰ってくるのを機に開催されることになった〔同1913年6月15日〕。また、13年9月30日には、東京高商出身者が、大谷邸で一ツ橋同窓会を開催した〔同1913年9月28日〕。質の高い読者層がいたことがうかがえる。巻末にある通り、書籍も早くから出版されていた。

#### 4. 『南洋日日新聞』による研究の可能性

『南洋日日新聞』を使った学術書・論文に、後藤乾一『原口竹次郎の生涯 南方調査の先駆』（早稲田大学出版部、1987年）、桑島昭『『南洋日日新聞』に見るインド兵の反乱（1915）』『アジア太平洋論叢』（18号、2009年、3-29頁）、早瀬晋三『東南アジアにおける第一次世界大戦—『南洋日日新聞』からみた大戦の影響』（山室信一ほか編『現代の起点 第一次世界大戦 第1巻 世界戦争』岩波書店、2014年、211-32頁）がある。いずれも、早稲田大学中央図書館所蔵のマイクロフィルムを利用したものである。

##### (1) 東南アジア史

1987年に公開された今村昌平監督の映画『女衞 ZEGEN』のモデルとして有名になる村岡伊平治（1867-1945）は、長崎県に生まれ、1885年に香港に渡ったのを皮切りに、87年に上海、88年廈門、90年シンガポール、92年ボルネオ島サンダカン、95年オランダ領東インド各地、1900年ミンダナオ、マニラなどを経て、10年からレガスピに落ち着いた〔今村1987:年譜〕。近代日本・東南アジア関係史研究の先駆者である矢野暢が「一行たりとも、過去の事実の検証のために用いる気にはなれない」〔矢野1975:40〕（傍点は矢野）と述べたように、村岡の自伝にもとづいたこの年譜は信用できない部分があるだろうが、村岡が東南アジア各地を転々としたことは事実だろう。

1916年の領事館別調査で、「からゆきさん」の分布は、つぎのとおりであった（詳細は、巻末表4）。

巻末表4：領事館別「からゆきさん」分布 1916年

	醜業婦	準醜業婦	外妾
シンガポール領事館			
海峡植民地	546		
マレー半島連邦州ほか	1,057		
マニラ領事館	282	50	59
バタビア領事館	406	607	79
バンコク領事館	26		
ホンコン総領事館			
英領ホンコン	156	40	37
ポルトガル領マカオ	6	8	
仏領ハノイ	113	80	
カルカッタ総領事館			
インド本土	67		
ビルマ	222		
ボンベイ領事館	102	11	
シドニー総領事館	51		
チチハル領事館	321	58	
ハルビン総領事館	794		
ウラジオストク総領事館	750	60	226



合計	4,899	826	489
総合計	6,214		

出典：外務省外交史料館文書 4.2.2.37 「本邦人不正業取締関係雑件」

在新加坡日本領事館の調査報告書には、表の左につきのような「備考」があった。「右ハ公娼ノ統計ナルモ尚他ニ白人、支那人並ニ馬來人等ノ外妾トナリ或ハ私ニ醜業ヲ以テ生計ヲ営ミ居ル所謂私娼ナルモノノ数右ト全數位ト見テ過ナルヘシ」。

そして、それは娼館関係者だけではなく。1931年8月15日発行の『南洋時代』（第2巻15号）のマラッカ在住の座談会で、10年ほど前に住み込んだ藤本が、「私は初めオーストラリアにダイバーで行き転々として歩きましたブロムにも居た事がありましたし、ボンベイ、カルカッタにも行きました。ラングンでも暮した事がありました。其の次にマグイに行きましたそこで九年から居りました」と語っているように、日本人は中国、東南アジア、インド、オーストラリア各地を転々とし、転々とした土地の様子が『南洋日日新聞』の記事になった。同じことが、初期のフィリピン在住日本人についてもいえる〔早瀬 2024〕。

拙稿「東南アジアにおける第一次世界大戦」で、東南アジア各地の影響を書けたのも、『南洋日日新聞』にその様子が掲載されていたため、これまで各国・地域ごとに書かれた歴史を、東南アジアという地域のなかで考察することができた。東南アジア各国・地域の個別史としても有効な資料といえるが、地域史としても重要な資料である。桑島昭「『南洋日日新聞』に見るインド兵の反乱(1915)」は、その一例を示している。

## (2) シンガポールの日本人社会

『南洋日日新聞』がシンガポールで日本人によって日本語で出版されたことから、シンガポールの日本人社会の考察に役に立つことはもちろんであるが、これまで使われたことはあまりなかった。シンガポールの日本人社会については、矢野暢の優れた先駆的研究〔矢野 1975; 1979〕で考察されて充分であると思われてきたが、『南洋日日新聞』の記事を詳細にみていくと、また別の日本人社会が見えてくるだろう。

たとえば、大手商社、銀行などエリート駐在員からなる「グダン族」と地元で起業し骨を埋める覚悟の「下町族」の階級社会が出現し、スポーツでも会社側のゴルフとテニス、下町側の野球に分かれ、グダン族は野球に入れてもらえなかった〔矢野 1975: 124-31〕と言われたが、初期には三井物産にも野球チームがあり下町族と試合をし、現地のアメリカ人とも対戦した。1915年2月11日に創刊した『週刊 南洋パック』は、表紙、社告の後、1頁全部を使って「早大遠征野球団」と題して選手が描かれ、「一月十九日郷国を去ってマニラに赴ける早稲田の野球団十六名ハ予定競技五回を終ったる後二月十五日帰途につく筈なり」とのキャプションがある。シンガポールの日本人社会では、いつごろからスポーツでも階級社会になったのか、それはなにを意味し、その後どう影響してくるのか、など考察を深めることができる。娼館が支配的な社会から商社・銀行員など本土の影響力が強い社会になり、そのまま日本占領下に入っていく一連の流れを、『南洋日日新聞』の記事から辿ることができる。

日本人については、娼館に依存した社会、それから脱却する過程などの人間模様が垣間見える。社会史研究にとっての材料に事欠かないが、すでのワレンの研究などでその一端が明らかにされている〔ワレン 2015〕。1970年代から「からゆきさん」にかんするノンフィクションが話題になり、その悲惨さが伝えられたが、いっぽうで海外日本人の野垂れ死にはあまり聞かれなかった。江戸時代には、江戸や大坂にでて病気になるたり老いたりして生活できなくなった者を、故郷に帰すことがおこなわれていた。それと同じことが、海外でも領事館や日本人会を通しておこなわれていた様子が、記事から伝わってくる。また、移動性のある漁民や真珠採取業者は、シンガポールを拠点にしていた。カツオやマグロの遠洋漁業や真珠ダイバーの動向がわかる記事もある。

### (3) 早稲田大学の南方関与

早稲田大学校友会新嘉坡支部の設立についてはすでに述べたが、たんなる同窓会に終わらない活動をシンガポールを中心におこなっていた。すでに井上雅二(1877-1947)のシンガポール滞在をとりえて臨時校友会が開催されたことを述べたが、井上は1911年にマラヤで創立された南亜公司(農園会社)の常務取締役としてシンガポールを訪れていた。さらに15年に設立された南洋協会の理事になり、20年に専務理事になった。井上は1899年に東京専門学校(後の早稲田大学)を卒業し、妻の秀(1875-1963)も女子教育との関係で大隈重信(1838-1922)の知遇を得ていたことから、ふたりの子どもの名付け親に大隈になった〔藤谷 2019〕。

井上雅二は南洋協会の理事としてもシンガポールを訪れる機会があり、早稲田大学校友会新嘉坡支部に招かれただけでなく、『南洋日日新聞』に連載を寄稿した。『南洋日日新聞』は、『新聞総覧』にあるとおり日本人栽培業者協会幹事の曾木重高とやまと新聞特派員の古藤秀三によって、1914年4月1日に創刊された。鹿児島出身の曾木は井上と朝鮮京城で新聞経営をしたことがあり、シンガポールに来たのも井上の招きで、日本人栽培業者協会の幹事をしていたところを『南洋新報』に聘せられたが、経営者と意見が合わず、『南洋日日新聞』を創刊することになった〔『南洋日日新聞』1915年11月27日〕。

京都生まれの古藤秀三(1885-1930)は、早稲田大学を卒業後、やまと新聞に入社し、1912年に社長の命を受けてシンガポールに渡航し、同地にとどまって南洋日日新聞社社長になった。早稲田大学では、ボート部および相撲部の選手であった。古藤は在学時代に大隈重信と直接面識がなかったようだが、創刊後数ヶ月が経った9月に「外務大臣伯爵大隈重信閣下」宛てに「請願書」を提出し、「外務省より年額三千円の補助支給を請願」している。発行部数1,000に満たないが、その読者の範囲を「暹羅、仏領西貢、英領緬甸及印度 蘭領東印度全島、西濠州、米領比律賓」とし、「帝国の平和的海外発展」のために請願したと述べている〔国立公文書館アジア歴史資料センター文書 B08090055700、外務省外交史料館戦前期外務省記録 5門2類 18項雑「日独戦争ノ際新聞操縦一件」〕。ちょうど、9月15日に改刊第101号を発行したときで、「祝辞祝電」の最初に「伯爵 大隈重信」の名があり、9番目に「井上雅二」の名がある。創刊号7頁には「早稲田大学校友会新嘉坡支部」も見える。

当時、早稲田大学はシンガポールで知名度が高かったのか、偽卒業生が現れ、早稲田大学新嘉坡校友会幹事の名で、つぎのような広告を出した。「今回当地に来れる浪花節語り小柳津二郎は早稲田大学出身たる様広告し居るも本大学卒業生に無之候間此段広告候也」〔『南洋日日新聞』1915年9月22日〕。

その後、1917年に起きた学長選出でもめた「早稲田騒動」で大学を追われた原口竹次郎(1882-

1951)が、大隈重信らの紹介で台湾総督府に奉職し、「南方調査」をした成果を21年に『南洋日日新聞』に連載したりした〔後藤1987〕。同じく「早稲田騒動」で教授職を罷免された永井柳太郎(1881-1944)がシンガポールを訪れ、校友会で歓迎されている〔『南洋日日新聞』1917年12月4日〕。

古藤秀三が1930年10月27日に亡くなった後も、『新聞総覧』では34年まで古藤が社長となっているが、その後は長く営業部長を務めていた早稲田大学校友の手塚貞吉が社長に就き、袂を分かった者が31年に『新嘉坡日報』を創刊した。手塚が継いだ後も、早慶戦など早稲田大学にかんする記事が掲載された。

#### (4) その他

このほかで気になるのは、まず圧倒的に記事の多いゴムにかんするもので、国際貿易、栽培業、労働者など、いろいろな視点で考察することができるだろう。つぎに、近隣諸港の伝染病などの情報が頻繁に入って記事になっていることが注目される。その関連でシンガポールの死亡者数の記事が定期的に掲載されている。当時の衛生状況を知るにも恰好の資料である。また、周辺地域の大雨・洪水、地震など自然災害についての記事も散見される。

1930年代後半に日中戦争が本格化すると、「検閲」されて空白が目立つようになる。そして、シンガポール発行の華字新聞が『南洋日日新聞』を参照するようになる。在住日本人を喜ばせた日中戦争の記事は、華人にとっては祖国の危機を伝えるものだった。それ以前から、シンガポールにしばしば滞在した孫文など中国革命家と、西村竹四郎など在住日本人との交流があった〔西村1936: 102-06, 377-88〕。シンガポールからみた日中関係を、考察することもできる。

さらに詳細については、おもな記事のリストやそこから作成した索引から、当時なにが問題で、人びとはどのように対処し、生きていこうとしたのか。支配者-被支配者、地の者-よそ者、老若男女など、植民地社会を生き抜いた人びとのたくましがみえてくる。

#### 〈おわりに〉

現在、東南アジア史でもっとも権威のある研究書として、アンソニー・リード著『世界史のなかの東南アジア—歴史を変える交差点』(名古屋大学出版会、2021年、英文原著2015年)をあげることには異論のある者はいないだろう。だが、巻末の参考文献をみれば、日本人によるものがほとんどないことに気づく。日本は東南アジア史研究の世界的な拠点のひとつで、多くの成果を出し、その一部は英語でも発表され、高い評価を得ていたのではないのか。にもかかわらず、参照されないということはなにを意味するのだろうか。

1939年にニュージーランドで生まれ、外交官を父にもったことでインドネシアや日本などですごした経験を持ち、ケンブリッジ大学で博士号をとった著者は、欧米からではなく東南アジアからみた東南アジアの歴史を書いてきた。そこで使った文献の多くは欧米のもので、英語の読者(英語で教育を受けた者を含む)を想定して書いたものであるといえる。

ヨーロッパ諸国が近世の「商業の時代」に東南アジアに進出し、近代になって各国・地域を植民地化して、東南アジアと深いかかわりをもったように、日本も東南アジアと歴史的に深いかかわりがあり、この著書でも多くのページを日本占領期とその後に割いている。近世においても、琉球や南洋日

本人町、日本銀の流入、傭兵や奴隷などが、ヨーロッパ人が残した文献にも出てくる。もちろん日本側にも資料はある。日本人の研究業績を参照していないということは、日本側の資料を間接的にも使っていないということを意味する。

欧米の文献を使って英語の読者を対象とする東南アジア史があるなら、日本の文献を使って日本語の読者を対象とする東南アジア史があってもいい（問題は日本語で教育を受けた東南アジアの人が読むかどうか）。ナショナル・ヒストリーは、それぞれの国民国家に任せるとして、巨視的な地域としての歴史は、東南アジア外からみるほうが書きやすいことがある。近世タイ・カンボジア・ベトナム関係や独立後のインドネシア・マレーシア・シンガポール関係など、とても内側から書けそうにない。それにたいして、欧米や日本とのそれぞれの関係をたどることによって、地域としての東南アジアがみえてくることもある。

東南アジア近代史を考えるにあたって、シンガポールはいい位置にある。東南アジア域内、中国、インド、欧米との貿易が、戦前からバランスよくおこなわれており、シンガポール在住日本人にもそれぞれの関係がみえてくる。それが活字になったのが『南洋日日新聞』である。それがわかっていたから、古藤秀三は大隈重信への嘆願書で、その読者の範囲を「暹羅、仏領西貢、英領緬甸及印度 蘭領東印度全島、西濠州、米領比律賓」としたのである。

近代日本と東南アジアとの関係は日本占領期に集中するが、それはそれまでの関係のうえでおこなわれたもので、たとえば日本は旧植民地の枠組みだけでなく、英領マラヤと蘭領スマトラを同じ軍政下に置いたりした。そして、戦後の経済進出も戦前・戦中の関係と無縁ではないだろう。東南アジア各国の独立後は2国間関係が中心になるが、1959年から2年毎に開催され地域としての結束を強めてきた東南アジア諸国だけが参加する東南アジア競技大会 SEAP GAMES/SEA GAMES に、日本は初期からかわり、青年海外協力隊の柔道などのスポーツ支援、運動用具の提供から、その後進出した企業のスポンサー参加、近年のマネジメントとコンサルタント、「勝ち飯」まで、在住日本人とともに地域の「多様性のなかの統一」を実体験している [早瀬 2020]。

戦前のシンガポール在住日本人が、本土の日本人よりはるかに地域としての東南アジアを考えることができたように、今日の東南アジア在住日本人は国を超えた地域のことを考えることができる。『南洋日日新聞』を通して、今日の地域としての東南アジア+（プラス）、その一員としての在住日本人のあり方を考えることができる。かつては国民意識が強すぎたが、地域の一員として、また、グローバル・シティズンとしてどう共生するか、東南アジアの人びとと考えることができる。

欧米にとってのアジアと日本にとってのアジアは、「他人事」と「自分事」だけでなくそれを超えたこととの違いがあるだろう。停滞する日本を、成長するアジアの一員と考えることによって、停滞と成長を地域の人びととともに考えることができる。成長もいずれ停滞に変わる。そのとき日本の「停滞」を活かすことができ、「成長」だけが目ざすべき社会ではないことも共有できるだろう。アジアからみた東南アジア史を考えるためにも、『南洋日日新聞』を活用することができる。

なお、本研究にさいして 2022-25 年度科学研究費助成事業（基盤研究（C）（一般））（代表：早瀬 晋三）の助成を得た。また、資料整理にあたって、シラス・オンサクルさんの協力を得た。記して感謝を申し上げます。

## 原史料

外務省外交史料館文書

4.2.2.37 「本邦人不正業取締関係雑件」

5.2.18 雑 「日独戦争ノ際新聞操縦一件」

7.1.5.4 「海外在留本邦人職業別人口調査一件」

『新聞総覧』日本電報通信社，1917-41年編纂

『復刻版 海外日本実業者の調査』不二出版，2006-07年，全8巻

スタンフォード大学付設フーパー研究所「邦字新聞デジタル・コレクション」

<https://hojishinbun.hoover.org/?a=p&p=home&e=-----en-10--1--img----->

## 〈参考文献〉（発行年順）

竹越與三郎『南国記』二西社，1910年（木村莊五編著『南国記』日本評論社，1942年）

伊藤吉彌『南洋之大富源 全』伊藤吉彌，1910年

塩見平之助『南洋発展』大来社，1912年

井上雅二『南洋』富山房，1915年

大野恭平『南方精図』丸善，1915年

佃光治『南洋より』好文館，1916年

『馬來に於ける邦人活動の現況』南洋及日本人社，1917年

長田秋濤『閩南録』実業之日本社，1917年

佃光治，加藤至徳『南洋の新日本村』南北社出版部，1919年

佃光治『南洋の五年有半』南洋及日本人社，1919年

台湾銀行調査課『新嘉坡ニ於ケル當舖』1919年

河野公平編『南洋総覧』好文館出版部，1920年

『新嘉坡市場に於ける日本商品』南洋協会新嘉坡商品陳列館，1920年

新嘉坡商品陳列館編『南洋之産業』新嘉坡商品陳列館，1920年

石井健三郎訳注『馬來聯邦州ノ現行法規 全』南洋協会新嘉坡商品陳列館，1920年

新嘉坡日本人会『新嘉坡概要』1923年（改正三版）

南洋協会新嘉坡商品陳列館編纂『英。蘭南洋に於ける邦人農園事業概要調査報告：附録日本人会及び代理者一覧表』南洋協会新嘉坡商品陳列館，1925年

辻森民三『新嘉坡てびきぐさ』花屋商会書籍部，1926年

南洋及日本人社編纂部編纂『南洋之現在 南洋及日本人十周年記念号』南洋及日本人社，1926年

『南洋時代』第1巻第8号，第2巻第15-23号，第3巻第1-24号，第4巻第1-20号，1930-33年

伊藤浪韻「新聞紙」連載（1）～（19）『南洋時代』第4巻第2-20号，1933年1月15日-10月15日

新嘉坡日本人会『新嘉坡日本人会々報 付倶楽部』第18号，1933年

西村竹四郎『在南三十五年』安久社，1936年

蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』学而書院，1936年

『シンガポールを中心に同胞活躍 南洋の五十年』南洋及日本人社，1937年

『昭和十四年度版 赤道を行く（新嘉坡案内）』新嘉坡日本人倶楽部，1939年

金子光晴『マレー蘭印紀行』山雅房，1940年（中公文庫，1978年）

西村竹四郎『シンガポール三十五年』東水社，1941年

佐藤徳十郎著，佐藤武英編『南洋時代—佐藤徳十郎のプロフィール』福大洋行，1968年

矢野暢『「南進」の系譜』中公新書，1975年

藤原藤男編著『梅森豪勇と南洋開拓伝道』キリスト新聞社，1977年

矢野暢『日本の南洋史観』中公新書，1979年

竹村民郎『娼娼運動』中公新書，1982年

小林一彦・野中正孝『ジョホール河畔—岩田喜雄南方録』株式会社アジア出版，1985年

今村昌平企画『村岡伊平治自伝』講談社文庫，1987年

後藤乾一『原口竹次郎の生涯 南方調査の先駆』早稲田大学出版部，1987年

西岡香織『シンガポールの日本人社会史—「日本小学校」の軌跡』芙蓉書房出版，1997年

『戦前シンガポールの日本人社会—写真と記録—』シンガポール日本人会，1998年

小島勝『日本人学校の研究』玉川大学出版部，1999年

西村雄志「20世紀初頭の海峡植民地における通貨制度の展開」『歴史と経済』188号，2005年7月，33-49頁

早瀬 晋三

- 桑島昭「『南洋日日新聞』に見るインド兵の反乱（1915）」『アジア太平洋論叢』18号，2009年，3-29頁
- 河西晃祐『帝国日本の拡張と崩壊 「大東亜共栄圏」への歴史的展開』法政大学出版局，2012年
- 早瀬晋三「東南アジアにおける第一次世界大戦—『南洋日日新聞』からみた大戦の影響」山室信一ほか編『現代の起点 第一次世界大戦 第1巻 世界戦争』岩波書店，2014年，211-32頁
- ワレン，ジェームズ・フランシス著，蔡史君・早瀬晋三監訳，藤沢邦子訳『阿姑とからゆきさん—シンガポールの買売春社会 1870-1940年』法政大学出版局，2015年
- 『シンガポール日本人社会百年史 星月夜の輝—シンガポール日本人会創立百周年記念 1915～2015』シンガポール日本人会，2016年
- 西原大輔『日本人のシンガポール体験—幕末明治から日本占領下・戦後まで』人文書院，2017年
- 藤谷浩悦『井上雅二と秀の青春 一八九四—一九〇三 明治時代のアジア主義者と女子教育』集広舎，2019年
- 早瀬晋三『東南アジアのスポーツ・ナショナリズム—SEAP GAMES/SEA GAMES 1959-2019』めこん，2020年
- リード，アンソニー著，太田淳・長田紀之監訳，青山和佳・今村真央・蓮田隆志訳『世界史のなかの東南アジア—歴史を変える交差点』名古屋大学出版会，2021年（英文原著 2015年）
- 早瀬晋三『戦前期フィリピン在住日本人職業別人口の総合的研究』早稲田大学アジア太平洋研究センター，2024年